

滞在のテーマ・現在の関心
「Double Orientation / 二重の見当識」

1. アーティスト・ステートメント
2. 応募動機
3. 滞在中の年間スケジュール
4. 滞在での活動イメージ
5. 現在の関心について
6. 活動イメージに関する図やドローイング
7. 自身の活動資料URL



“心臓が動いている”, 2021-2022 より

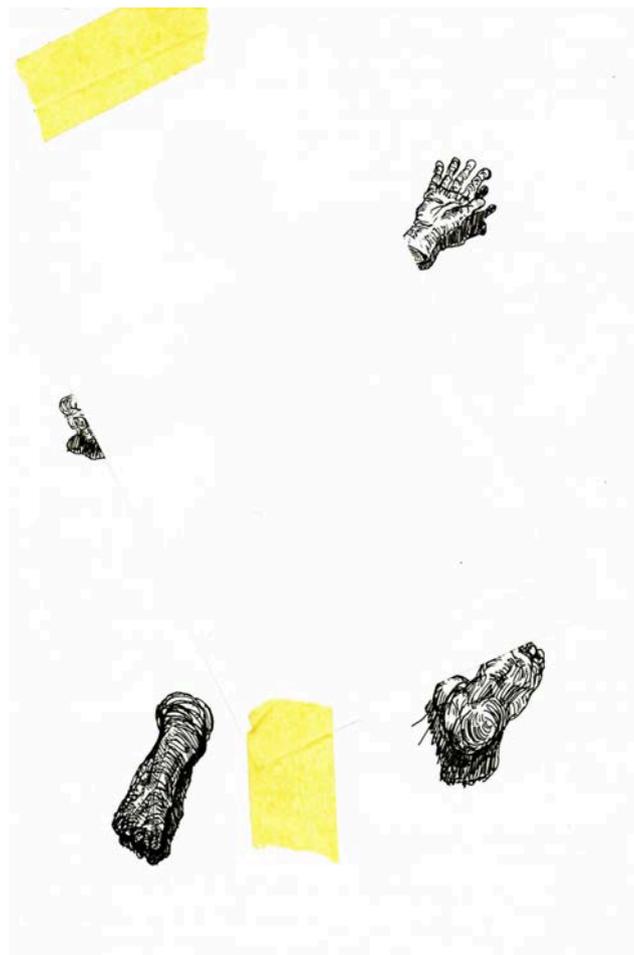
1. アーティスト・ステートメント

私は主に映像表現を通じて、人間の精神を探究しています。テーマは感情、死生観、自明性 / 常識、精神病理などであり、社会と個人のあいだで揺れ動く領域に焦点を当てています。近年は、作家と被写体との親密な関係性の中から生まれる表現に関心を持っています。

私の制作の基盤には、引きこもりだった思春期の経験と、精神保健福祉施設でスタッフとして働いた経験が深く影響しています。これらの経験は、人間の内面世界に対する観察や想像、他者との対話の過程、社会的規範の相対化、そして答えが出ない問いに対して分からないなりに想像を巡らせることを、私の中で育んできました。

人は、悲しみを抱えながら笑うこともあれば、喜びから泣くこともあります。大きな声は単純化を強いられることがあります。小さな声は複雑さやニュアンスを保つことができます。私の映像作品は、私的な人々の声に耳を傾け、その最も内奥にある物語に、結論を求めることなく想像を巡らせることを鑑賞者に促します。

人間の精神を探究する中で、私が芸術表現に求めるものは、私たちの人間性を規定する数多くの境界線を揺さぶる力です。



2. 応募動機

応募動機はシンプルで、病院という空間で精神の病に関わる方々と出会い、交流することを目的としています。

私は一貫して人間の精神に関心を寄せる中で、精神病理にまつわる作品を制作してきました。その背景には、思春期の3年間を引きこもりとして過ごした経験や、精神福祉施設で働いた経験があります。

勤務先の地域活動支援センターでは、利用者の方の創作活動支援やワークショップの企画・実施が主な役割でしたが、困りごとの相談に応じることも求められました。しかし、専門資格を持たない私が相談に乗ってよいのか、例えば「死にたい」と毎日電話で訴える声にどう応答すべきか、当初は常に葛藤していました。そんな彼らと一緒に過ごす時間の中で、自然と選んだ態度は、職員としてではなく「一人の人間として向き合うことしかできない」というものでした。この姿勢は私が他者と共同して作品を作る際の一貫した態度となり、大切な気付きとなりました。

今回の滞在では、病院という専門領域の空間で私ができることは限られていますが、ひとりひとりの人間と向き合うことで見えてくるものを、丁寧にすくい取り、そこから何かできるかを考えてみたい。私にとって「ケア」とは、少なくともアーティスト自身が声高に語るものではなく、実践の中から自然に生じる副産物でしかないと考えています。したがって、私の取り組みは「ケア」を目的とせず、病をめぐる探究としての実践だと考えています。

私は他者と完全に分かり合うことはできないと考えます。むしろ「わからなさ」の断絶を尊重し、そこに想像を向け続けることが大切だと思います。答えが出せない問いに対して、わからないなりに想像し続ける。その思考を今回の滞在でも深めていきたいと考えています。



“CRPPP -包括的抑圧防止プログラム-”, 2023 より

3. 滞在中の年間スケジュール

滞在開始時期の希望：

2025年11月から

滞在中の年間スケジュール：

コア期間 2025年11月～2026年4月（6か月）

11月下旬～ 滞在開始、歓迎イベント

12月 病棟・デイケアでの滞在・創作・交流（病院内の雰囲気をつかんでいく）、WS(ワークショップ)

1月 病棟・デイケアでの滞在・創作・交流、保護室滞在希望(一週間から二週間位)、WS

2月 病棟・デイケアでの滞在・創作・交流、WS

3月 病棟・デイケアでの滞在・創作・交流、活動成果発表の準備、WS

4月 活動成果の発表(アウトプットについては、滞在中皆さんと一緒に柔軟に検討したい)

フレックス期間 2026年5月～2026年10月（6か月）

5月～9月 月1回程度の滞在・創作・交流

(コア期間の延長として捉える、内容的にやることはあまり変わらない)

10月 ふりかえり会

年間予定は、大内病院さんの方で例として挙げたものをひとまず準拠させていただいています。私は都内在住ということもあり、柔軟に滞在与通いを行って、具体的には月に最低でも10日間の滞在、長いときは1か月まるまる関わっていきたいです。そのため、コア期間とフレックス期間についても、厳密にこのような区分けを進めていくかは、滞在中の出来事に応じて、その都度検討したいと考えています。

また、1年間と言わずレジデンス期間が終了した後も、何か関わる機会が設けていけたら望ましいと個人的には考えています。



“Someday's Sleep”, 2022 より

4. 滞在での活動イメージ

滞在にあたっては、まず病院とそこにいる患者さんや利用者さん、そして職員の（患者と医療者の間に位置する清掃員の方等含めた）方々とお喋りをしていく過程で、病院の雰囲気をつかんでいきたいと思っています。また、可能な限りになりますが、月に一度はワークショップ(WS)のようなイベントを行い、私の制作関心にまつわる内容+私の滞在の経過報告も兼ねた時間を作りたいと考えています。

それというのも、今回の滞在にあたって滞在するイメージを想像した時に、以前務めていた精神福祉施設での経験を思い返していました。施設では月に何度か創作的な時間として、WSなどのイベントを企画・実施していましたが、そうした企画は、人々が一度に集まって関わる密接な共有体験を作り出すきっかけに繋がっていくと感じています。

また、病院内で長期にわたって過ごす想像した時に、私の作品制作を主体的に強引に行っていくことよりも、圧倒的に皆さんとただ世間話をする時間が多いと思っています。それは以前の施設での経験や私の作品制作のプロセスにとっても、ただのなんでもない世間話をしていく過程そのものが、私にとって重要な「親密な関係性」を形作るただ一つの方法だと考えているからです。

そして、なんでもない話から表現領域に転じるきっかけとして、私の現在の関心「Orientation / 指針」というものを、今回の私の滞在のテーマにしてみようかと思っています。下記に私の関心について続けていきます。



“火の会話”, 2021 より

5. 現在の関心について

私の現在の関心は、「Double Orientation / 二重の見当識（二重の帳簿）」という精神病理学で用いられる言葉にあります。それは主に統合失調症者が幻覚や妄想を基底とした世界認識と、一般的に正常とされる社会常識的な認識の、二つの認識を持った状態を指すことだそうです。

Orientationは、現在では「研修」などの意味合いで多く用いられていますが、その語源はラテン語の「東方」＝「陽が昇る方角」から転じて、「方向づけ」や「指針」などの意味を含みます。

人が生きる上で必要な指針として「Double Orientation」を読み直す時、同時に二つ持ち合わせる「二重の指針」であるならば、もしかしたら生きづらいことなのかもしれない。しかし、私はこの同時代に一つの指針を信じることさえ困難だと感じています。それならいっそのこと、二つと言わずいくつもの指針を抱えて、あえて道に迷いこむというのも案外悪くないかもしれない。さまざまな針が共存する揺らぎとしての「Double Orientation」を考えてみたい。

この滞在では、私自身が指針としての芸術や生きることについて悩み、道に迷いこむ中で、私と関わる人々も巻き込み、それぞれの指針について考える機会を作れたらと考えています。例えば関わる人たちに質問をして「あなたにとっての太陽が昇る場所はどこですか？」とか「（地図を見ながら）あなたにとって印象深い東の場所がありますか？」など。そして、すでに指針を明確に持つ人なら「あなたがもうひとつなれるものがあるとしたら何になりたいですか？」などを聞いてみても面白いかもしれない。

ちなみに、もし私が芸術や人生に挫折したとしても、私には既に2つ目の指針として、ジャズミュージシャンの道が存在しています。今気づいたが、どうやら私は現代美術よりもジャズの方がプロフェッショナルなのかもしれない。NYのBlueNoteやヨーロッパのNorth Seaに呼ばれている気もする。楽器は何も弾けないけれどそれは全く重要ではなく、一番重要なことは分かっている。一つの演奏曲という枠組みの中で、いかに自由に振る舞うことができるか。周りと合わせる”セッション”とその場で未知の新しい音を獲得していく”即興”。

滞在の中で出会う皆さんに、「ジャズに必要なことは何か？」と聞いて学ぶのもいいかもしれない。もしかしたらジャズの他に新たな指針を得ることもあるかもしれない。

そして、病院でのセッションとははたしてどのようなものだろうか。私にも全くわからないので楽しみです。

最後に、「二重の見当識」に関心を持つきっかけとなった、私が好きな話があります。

最初の症状は発明妄想だった。「他人の考えを探知する機械を発明したために、某国大使館から追われている。入院はその追求を避けるため」だった。彼はひがな一日その機械の設計図の修正にはげむ。三か月の入院生活の後、一年して某大学に入学。主治医の予想に反し、留年することもなく卒業し、故郷の先生になり、そこで大変はりきって仕事を始めた。(略)

初診以来二十数年をかいつまんでいうと、三十歳で結婚し、一子をもうけ、数回の転勤をこなし、無事教師の生活をおくって今日にいたる。主治医でなくなった今でも、新しいことに対処しなければならないときなど、手紙や電話で意見を求めてくる。

ところが、この二十数年のあいだに医師は二度びっくりさせられた。一度目は、縁談がおこり彼がことのほか緊張していたとき、診察中表情をかたくして「もし結婚申し込みがうまくいなくても、自分はノーベル賞級の研究をしているのだから研究者として生きていきます」といったときだった。かつての発明妄想について語らなくなって何年にもなる彼が突然そういうのである。しかし、それ以後なにごともなく平和な生活が続いた。

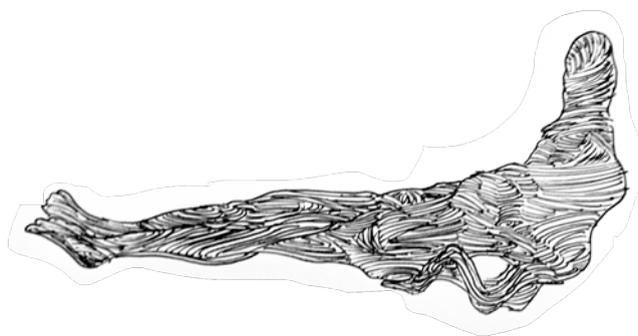
ところが、数年後のあるとき、いつものように心のこもった手紙のなかに「教師の定年後はアメリカにわたって例の研究を続けるため、英語の勉強はしたいが、どうお思いか。文献によればかの国では研究が盛んです。あれ(発明妄想)は空想ではありません」という一文をみつけて、もう一度驚く。— (略)

分裂病の人は現実世界と空想世界をまるで二重帳簿のように別々にもっている。しかし彼にとっては二世界が共存していただけではなく、発明妄想は彼を支える唯一の根源であって、もしこのいわゆる「妄想」をとりのぞくことを医療の目的として徹底すれば、おそらく彼の二十年のこの教師生活という現実を支えを失っただろう。

ただしその「妄想」は急性期のときのように水面上にいつもあるのではなく、終始水面化にあって、たまたま二度だけ、かつての主治医(今の主治医ではない)に向かって一瞬かいま見せられたにすぎない。

『精神病』笠原嘉、1998年、岩波書店(岩波新書)、引用箇所 p113 - p114

*参考引用元：藤縄昭「友人のごとくに(治療覚書)」『精神科治療学』四、一三〇三 - 一三〇六、一九八九。藤縄昭「頻回再発をくり返しそれなりの人生を全うした例」『精神科治療学』一、五八五 - 五九三、一九八六。



6. 活動イメージに関する図やドローイング

過去に行ったワークショップ(WS)の事例

1. WSの様子

温かいもの、冷たいもの、明るいもの、暗いものなど、様々な抽象的な「～のもの」を言葉に書き出し、それに付随したイメージの粘土の造形物を参加者一人一人が作成した。その後、作った造形物を砂が敷き詰められた箱庭に配置していく。参加者それぞれがどのような「～なもの」を意味やイメージを込めて配置したか。それを自分一人だけでなく、参加者複数人と囲み、箱庭の造形物を話の流れに応じて移動させたり、砂をかけてみたりと他者の介入を許す状況の中で、周りの参加者と会話を行っていくというもの。箱庭療法を療法ではなく、対話としての形式に落とし込んでみるという試みと、参加する職員や利用者の方の関係性を、自由で対等なものとの関係性を目指してみるという試みのもと行った。



2. WSの様子

今考えていることを身体に書いて(貼って)みる、という内容のWS。



...上記のような抽象的なWS以外にも、絵画や粘土で造形をしてみたり、シルクスクリーン印刷やタイダイ染めといったわかりやすい創作活動も行っていった。その他に、映像作品を作ったり、ラジオを収録してみたり、施設内の職員や利用者の立場を超えて自由かつ対等に話すことを目指す「語る場」の企画など、参加者の意見も考慮しながら行った。

ジャズの二重見当識イメージ

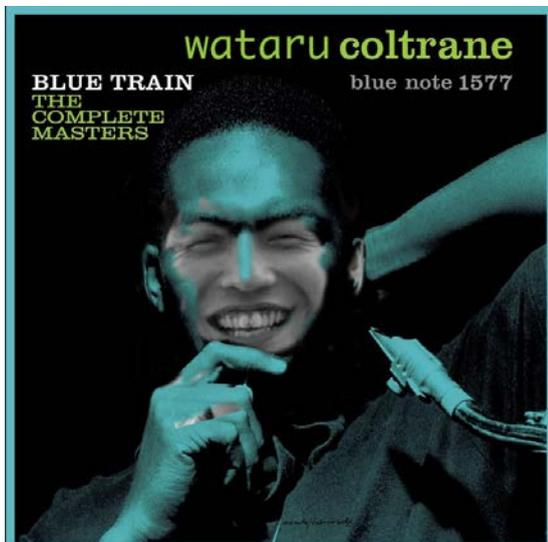
1.セッション イメージドローイング

- ・病室でセッションを行う様子。楽器を現実には持っていないかもしれない。
 - ・「人間学的均衡」...通常、人間は均衡を保つために垂直方向の意識と水平方向の意識の二方向が拡大縮小を繰り返すという。
- (精神科医 L. ビンスワンガー (著), 宮本 忠雄 (監訳)・関 忠盛 (訳). (1995). 「思い上がり、ひねくれ、わざとらしさ -失敗した現存在の三形態」 みすず書房)



2.アルバムジャケット

- ・コルトレーンだったかもしれない。



7. 自身の活動資料URL

1.日本語ポートフォリオ+CV(映像作品視聴URL付き)

https://bd1e0acf-d9aa-473a-b91d-917b44cadee9.filesusr.com/ugd/64c3a4_f991c7e49f1b45438ad71c803cd02d5e.pdf

2.作家Webサイト

<https://www.watarukoyama.com/>

3.テキスト(レビューや展覧会ステートメントなど)

<https://www.watarukoyama.com/text>